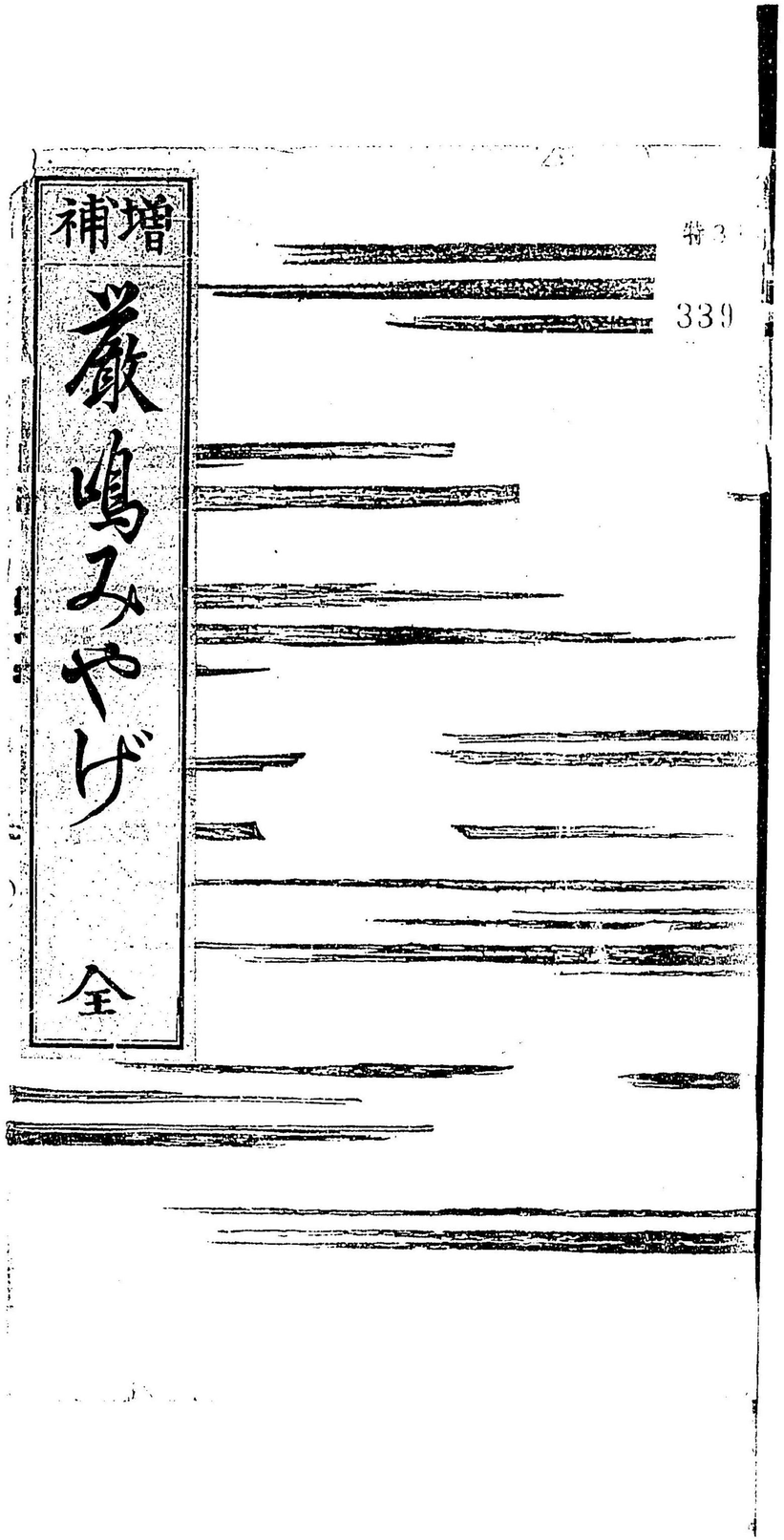
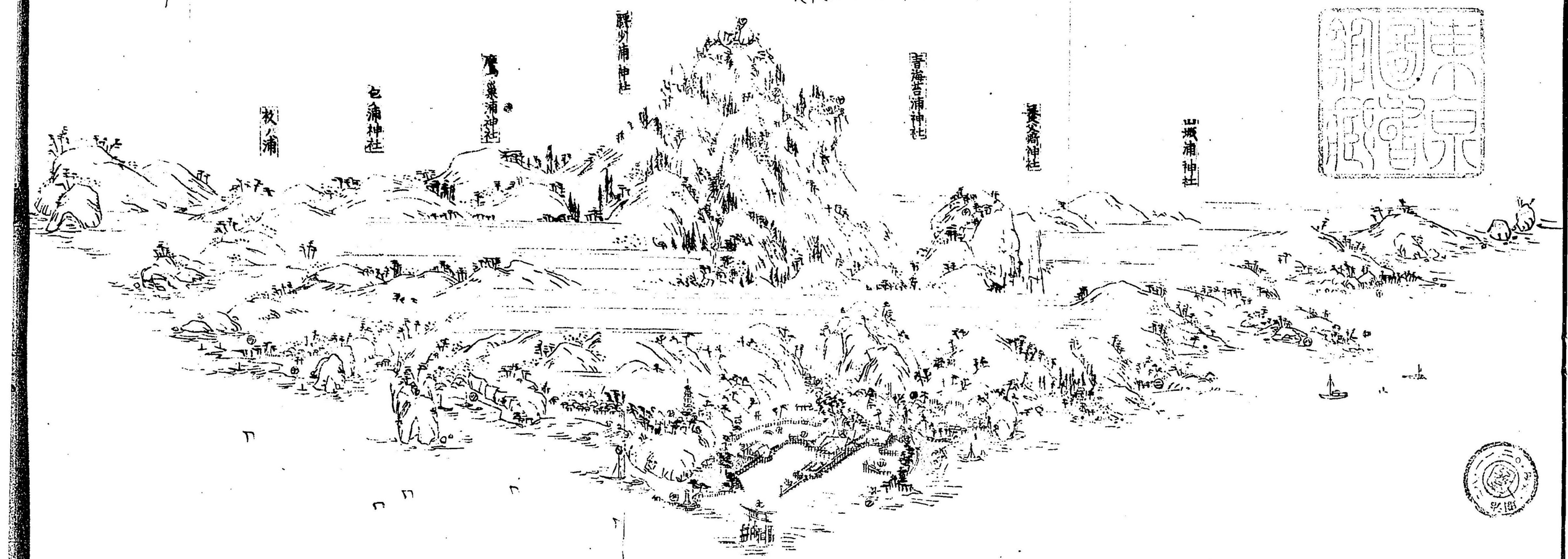
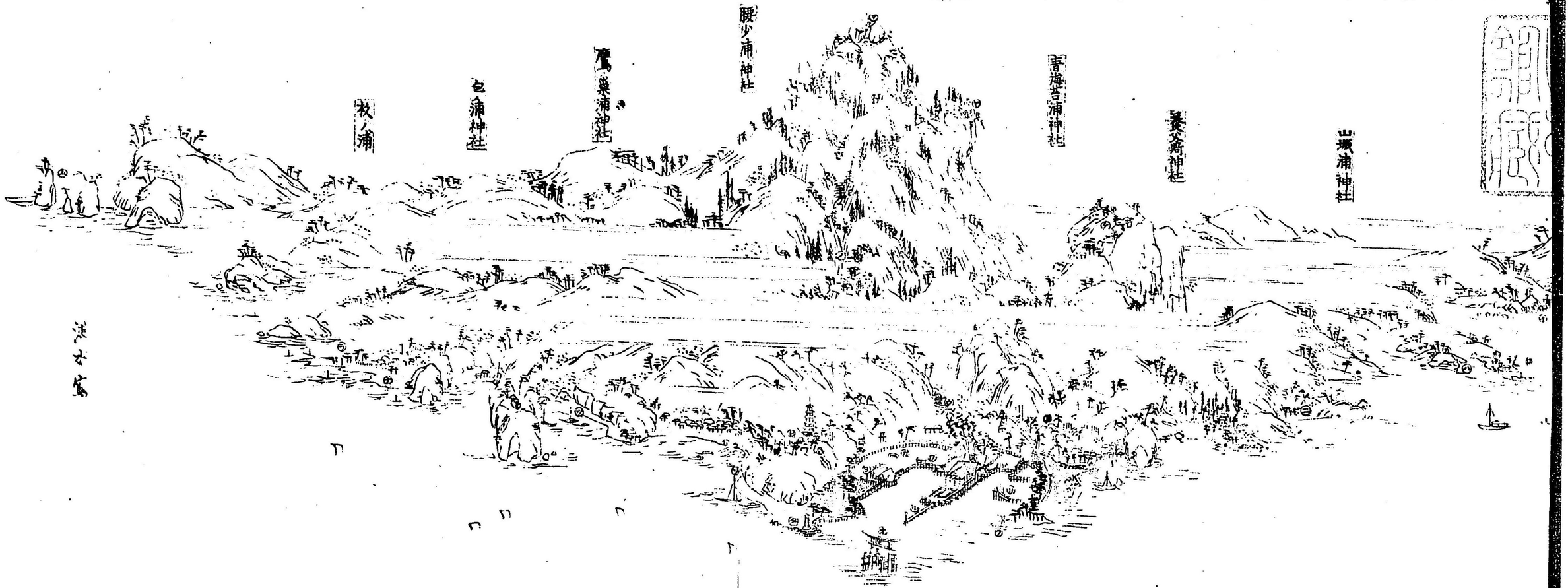

増補
巌鳴ふやげ
全
特3
339

教鳥の図

海上巍然
神ヶ崎
山間逶迤
梵王家
春色滿島
二三月
處々香雪
皆是花

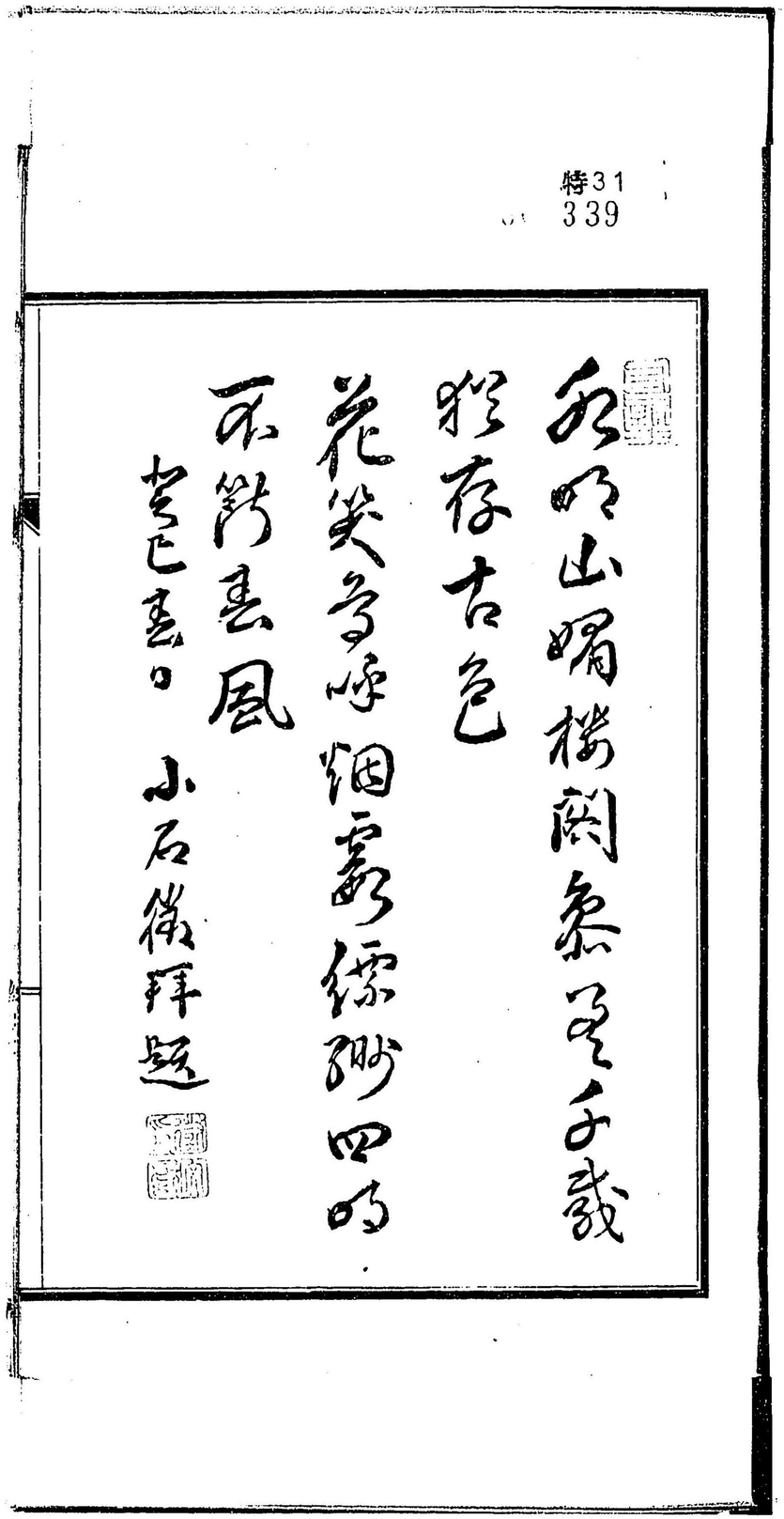
賴杏坪





(イ)内海石
(ロ)網ノ浦
(ハ)大元神社
(ニ)石ヶ
(ホ)大願寺
(ヘ)御幸松
(ト)能舞臺
(チ)御本社
(リ)古さき
(ヌ)大島井
(ル)鍋亟屋
(ヲ)鏡ヶ池
(ワ)宮八神社
(カ)三かりすまし
(ヨ)卜晋閣
(タ)右の浦
(レ)小うら
(ソ)西行ゑし
(ツ)長すま
(ネ)海水浴場
(ナ)聖
(ラ)ちみど谷
(ム)滝の宮
(ウ)白糸瀧
(ヰ)中ノ堂
(ノ)永開持堂
(オ)御山神社
(ク)亘上
(ヤ)奥ノ院
(マ)新地ノ鼻

特31
339



序

蜻蜓洲裡好山水多し而して其最たる者を藝の嚴島となす一幅の活畫圖ハ鏡のて佐伯郡の海上に立り其風景の奇絶清絶なる實に是天巧を帝せる者なり況んや宮殿壯麗にして人工の極致臨毋の偉観を呈するに於てをや凡そ境の殊なるものハ之が才の優妙に待つて而って彌く其自然の美を發揮す故に此地亦古人の題詠多く詩に歌に俳句に之を称述する者甚多しと雖も未だ之を無せる者あらん是に於て乎予が嘗て記名所圖會の法もあり以て全島の光景を細寫し其詳を天下に知らしむ終ればも頃某記ハ元禄年間希に好する所にして名所圖會ハ更に係年中の編纂に係る故に其記ハ嚴島の古を攻むるに詳なりと雖も今を知るには頗る闕くる所ありかくてあらんには旅客の携帯に便ならんば仙寰に全島に感あり寧ろ全島の勝地に就きて其概略を記し且其沿革に溯りて[illegible]嚴島みや此と曰ふ[illegible]にして記ほどよくその要を得たり其要ハ嚴島に於ける者の親切なる案内者となり便利ある紹介者となるハ是を措て他なからんや其精密に形て恰好の土産物となるべし須らく之を改校するに際て序を予に徴し予辭するを得ず乃ち一言を題すと云爾

明治乙未之歳夏四月　嶌魁居士　太田貞次郎 識

大元神社

嚴島土産

嚴島は安藝國佐伯郡の海中に在て周廻七里北の方廣島を去ること五里餘西の方は同郡大野村最近くして一里に充す。南ははるかに周防伊豫の山々を見渡し東は能美江田等の諸島に對し山嶺巍々として松杉色深く人戸千軒本社のかたはらに市をなせり。殊に當島は櫻樹數株ありて艶陽の花の頃は。白雲長く連なりて山の腰に靉靆す。本社は戌亥の方に向ひて三笠濱の下津石根に宮柱太敷立て。潮滿時は大宮の床下まで浪をたゝへて。遊べる魚も手に捕るばかりなり。抑當社本殿に鎮りまします三柱の姫大神は。掛巻も かしこき素盞嗚尊の御子にをはしましけるが。天照大御神の神勅のまゝに葦原の中津國に天降りましまして天孫の爲に祭れたまふ我が皇國の守護神たりの意を取る斯て當社に御鎮座ましましける事は以上神代記人皇三十四代推古天皇の御代端正元年大歳癸丑一書に端正五年とあり。然れども大歳癸丑とあるに依れば元年なるべし○端正は年號にあらず天皇卽位の年をいふといひつたふ詳名不二人同郡恩賀島に魚を釣てありしに紅の帆を揚て西の方より來れる船ありて近づきて船中を窺へば舳前に嚴鉾に赤幣立たる嚴瓶を置て三柱の姫宮おはします。鞍職にむかひて宣まはく吾は古より此島を敷て幽事を治め

百王を鎮護す汝朝廷に奏て此島に造宮すべしと示現あり。即鞍職都に上り神託の次第奏聞を遂げるに。折節都にてもまた神變ありけるによりて。奏す隨に社殿造營すべく勅命あり。鞍職畏りて當島に歸り。先づ大宮造るべき地を定んと新に船を造て舳前に五百津眞賀榊五百津野蔦の八十玉串を珍の幣帛とりかけて。當島の浦々を覓巡るに鷲鳥山上より飛來て舳前に進む乃ちこれを導の神として海濱を漕回行に竟に三笠濱に止まるかくて佐伯所の二翁諸人をひきゐて三笠濱の大石小石を打ならし遥山近山の大峽小峽に立て樹を斉斧以て伐採り高天原に千木高く新宮造建て其歳の十一月辛酉朔壬申常世の神籬と祝ひ定て鎮奉る。以上當社鎮座記の意を取るまた古傳に人皇十一代垂仁天皇の御代大神此島に御鎮座ありて御山神社其舊跡なりといふ推古天皇の御代佐伯鞍職に示現ありけるにより大宮造立ありしものなりといふかゝれば當島舊は思賀島といへりしを。大神鎮座ましましけるにより神の御名を島の名におはせて市杵島とも伊都伎島とも稱へまた嚴島とも稱ふなるべし又宮島といへるも古くものに見へたれども今は公の御文にすべて嚴島と稱へられたり斯て創建の後度々朝廷より修理を加へさせられ祭式も重く行はせられける由いひ傳ふれども天文十五年當社神主源廣就佐伯那櫻尾の城主たりし時大内義隆に亡され舊記多く兵火に罹りて失ひたれば往古朝廷より御寄附等の證據となるべき文社藏ある事なし然れども延喜式神名帳に安藝國佐伯郡伊都伎島神社大名とあり三代實錄に御贈位の事二度まで見もれば當時御祭式等のおろそかならざりし事おしてゝるべしかくて平相國清盛安藝守たりし時より渴仰の思ふかくさらに神領を增加し社殿經營功を盡し攝末社に至るまで殘る處なく修理ありければ世に比類稀なる壯觀とぞなれりける殊に承安四年後白河法皇御幸あらせられまた治承四年高倉上皇御幸の節には金銀の幣捧げたまひて御崇敬淺からざりし御事なり其後鎌倉の將軍家續て足利氏また本國の領守大内毛利副島淺野氏よりも時々祈願を籠られ神領寄附米許多ありて絶ず社殿に修理を加へ祭式怠る事なく行はれけり明治元年朝政一新の際改て勅願所に定めさせられ年々御撫物を治めたまひ同四年神佛混淆引分となりて別當供僧と廢止せられ尋て國幣中社に定めさせたまひ祭式等嚴重に改りけるは誠にありがたき例にこそ有けれ

○參拜順路

○有の浦　蟻浦とも云ふ島の要津にして毎日漁船來往し櫓聲呻軋大概此處に湊ふされは參宮の客送迎諸荷物の運輸等常に賑はしき處なり

○蛭子神社　有の浦にあり

祭神　事代主命

○尼の洲　壽永四年檀の浦にて入水ありし二位尼の尸此處に漂ひつきたりし處なりと云傳ふ今尼公の像は神泉寺にありと云ふ

○三笠濱　島居の洲とも云ふ此處左は本社の殿宇建連り右は遠く海に向ひ山々を望みて雪の景色甚た佳なり

○神厩　東廻廊口にあり元の湯立殿の處なり

○廻廊　巾貳間貳尺長百四十八間三尺本社東西に屈曲し壹間毎に鉄燈籠を釣たり祭事其外献燈せん方々社務所に案内あるへしいつれても點火すへし

○槍馬額　是は別に掲く

○客人神社　東廻廊入口に鎮座あらせらる

祭神　五座

天忍穂耳尊　天穂日命　天津彦根命　活津彦根命　熊野櫲樟日命

○本殿　梁　五間貳尺三寸　桁　七間五尺五寸

○幣殿　梁　貳間三尺五寸　桁　貳間四尺七寸

○祓殿　梁　五間壹尺四寸　桁　五間三尺五寸

○大床　巾　四尺六寸

○拜殿　梁　四間壹尺八寸　桁　十三間貳尺

○鏡池　客神社の邊にあり潮退て後くぼき處わり秋夜一輪の月光をすましひ

○朝座屋　梁五間壹尺五寸桁十壹間八寸當時嚴島講社事務所となり日日事務取扱居れり加入申込る、人は此處に申込みあるへし

○朝座清水　朝座屋の傍なる瑞籬の内にあり猥りに汲事を不許此水清冷にして又藥の水とも云ふ

○卒都婆跡　平判官康頼鬼界ヶ島より流したる卒都婆の寄りたりしと云ふ石あり又康頼歸洛の後寄進の石燈籠一基建り形甚だ古雅なり

○揚水橋　巾壹間五尺長三間東廻廊御垣ヶ原に行處なり

○應接所　内侍橋脇御本社東傍にあり

○本社　安藝國一の宮嚴島大御神

祭神　三座

伊都岐島姫命　田心姫命　湍津姫命

○相殿　三座外に卅三座

國常立尊　天照皇大神　素盞嗚尊

○本殿　梁　六間三尺六寸　桁　十三間貳尺貳寸

○幣殿　梁　三間壹尺五寸　桁　三間壹尺八寸

○祓殿　梁　六間四尺八寸　桁　十三間三尺八寸

○大床　巾　五尺

○拜殿　梁　六　間　桁　七間四尺四寸

○高舞臺　竪　三間四尺、　横　三　間

○平舞臺　平面　百八十六坪　石柱　三百十二本　高五尺五寸　圍八寸

○樂房　左右二宇各梁　貳間五寸　桁　五間五寸

○火燒前　廊脇舌先と云巾　壹間五尺三寸　長　七間壹尺三寸

○門客神社　二宇火燒前の左右にあり

祭神　豐磐間戸命　櫛磐間戸命

○社務所　本所西脇にあり日々社務を取扱處なり

○玉の御池　總て大鳥居より神殿の邊を云ふ玉は讃美の詞なりとぞ

○大鳥居　火燒前より五十貳丈八尺本社の廣前に巍立せり

○柱　高　七間貳尺五寸　圍　五間三尺三寸

○副柱　長十貳間壹尺七寸　上棟より軒先まで壹間六寸　左右距離五間五尺八寸

○額庇　貳　間

○總高　八間三尺七寸

○額　竪壹間貳尺三寸　横　壹間貳尺

○古より凡そ此鳥居を改作せし事不詳然れとも平家物語に清盛鳥居迄て造るとあり其後仁治寛元の間本社修造せしとき改造す又弘安九年應永四年永祿四年天文十六年元文四年享和元年等改造數度ありしか今其一二の棟札に曰く永祿四年建替棟札に左の書あり　奉建立大鳥居一宇當旦那吉田住人毛利大江右馬之頭元就當屋形毛利備中守大江朝臣隆元十ヶ國の大將也小早川又四郎平朝臣隆景吉川治部少輔藤原朝臣元春(以下畧之)當島座主大納言棚守左近將監房顯との文字あり又天文十六年丁未六月七日袖柱建立仝七月二日眞柱二本仝九月廿七日御棟上の執行あり盛大なる舞樂御供御湯立等の式あり仝十七年義

隆卿の裏書あり其後改造數度ありしか今建建るは明治七年十二月斧始めありて仝八年七月棟上の式あり明治二十三年十二月惣柱根元修補せり○額字は往古の分は表小野道風裏空海の筆なりと云ふも今はなし元龜元年改造の時多々良朝臣大内義隆奏請し後奈良天皇御震筆の御額は今神庫に藏す當時の分は有栖川熾仁親王殿下の御染筆

○大黒神社　本社西廻廊にあり

祭神　大國主命　○相殿　保食神

○長橋　巾壹間四尺八寸　長　貳十間

○天神社　仝上毎月連歌の會あり故に連歌堂と稱す

祭神　菅原大神

○圓橋　反橋と云ふ　巾　二間二尺　長　十一間三尺

○能舞臺　毎年舊三月十六日より三日間能興行あり伊豫廣島等より能師參集いと賑かなり

○行宮跡　能舞臺のわたりをいふ高倉上皇御幸の時此所に御所を設けられたりといひつたふ

○瑞籬　東廻廊入口客神社并に御本社の外垣を云ふ周圍百九十一間四尺余

○花園　御花畠と云ふ本社西廻廊の後を云ふ櫻尤も多し

風塵易負是烟霞　咫尺江山萬里賒　獨與嚴州絲不惡

五年兩度去觀花

○御幸松　後白河法皇御幸の時此處に松の木の御所と稱へし行宮のありしといひつたふ

○御垣ヶ原　本社の後なり舊は本地堂ありけるによりて觀音の原といへりしを明治四年改革の際本地堂を取除きて今の名に改まりたり此邊も櫻おほし

○御手洗川　本社の後の流を云ふ水源は江藥谷なり一に御靈川と云ふ昔此水を神供に用ひしか故なり

○松原　右は玉の御池左は御手洗川の流にそひて長くさし出たり松の木間に石燈籠あまた立ならびて是又社頭の光景を添ふ

○大願寺　眞言宗なり明治四年改革の前本社修理造營の事を掌どれり庭内に小松内府の植たまひしと云傳ふ老松ありしが今は枯て僅に古跡を存せり什物に古鐘屏風豐太閤陣中の吸筒其他書幅等あり

○住吉神社　舊は大願寺の境内なりしが改革の際神地をわかつ
祭神　表筒男命　中筒男命　底筒男命
○石風呂　石を畳み土を塗て室を造り松を焼き潮をそゝぎて海藻をしき病者を入らしむ此風呂弘法大師の所造にして功驗甚多しといふ
○大元浦　平原海に臨みて數株の櫻枝を接し花盛の頃は蒼々たる草の上に紅の毬敷て遊宴の興かぎりなくはるかに大野の山を望みて夕陽を惜まぬ者なし

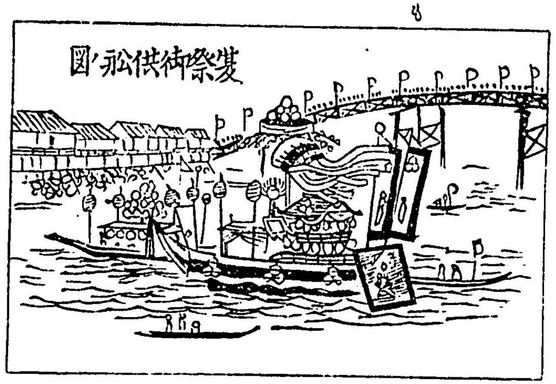
大元櫻花　八景の一

大元の花のさかりに成にけり神のおとめも袖やふるらむ　忠秋
おなしくは櫻の限りしめはへて誘ふ嵐をよそにふせかむ　紫民
くろき羽を花にわり込むからすかな　梅通

○大元神社　大元浦にあり○一月廿日百手の式を行ふ
祭神　國常立尊　大山祇命　保食神　○相殿　佐伯鞍職
○橋山　此邊時鳥を聞くに便よき處なり○因に云當嶋にては時鳥いと
おはくおのかさつきの頃となれば山にても鳴き浦にても名のり誰か
は待わかしてつれなしと倶る人のあるへき

なれもまたむかし去のふか時鳥たちはな山の夕くれの聲　石子
家いへに聞してもくやはとゝきす　鎖操
○清盛山　石風呂の邊り山の桑に清盛の碑あり
○經の尾　平清盛小石に法華經を書て納められし所なり
○空穗谷　秋夜草むらにすだく虫の音いとあはれなり
浅ちふや月に玉しく露ふけてむしの音そよく夜半の秋風　頼玄
虫鳴くや去つかにひゝく磯のなみ　快々
○筋違橋　御手洗川にわたせり
○寶庫　筋違橋の東にあり寶物は卷末にあり
○湯立殿　同所にあり
○三翁神社　同所にあり九月廿三日舞樂を奏す
祭神　佐伯鞍職　所の翁　岩本翁　○相殿　大己貴命　猿田彦大
神　平相國清盛公
○千壓閣　龜居山に建り豊太閤九州發向の時本社に參詣ありて大神の
冥助を祈り翌年凱陣の折柄また船をよせて報賽ありし時此堂を造ら
れしものなり此處臨觀宜し

○豐國神社　千疊閣の内にあり
祭神　豐太閤
○五層塔　應永十四年七月建立といへり
○多寶岡　多寶塔ある故にかく名付く此邊も花見によき處なり
○寶山神社　祭神　清正靈神
○愛染院　眞言宗大聖院の末派なり
○瀧本坊　同　上
○清盛旅館跡　久保町にあり
○留守口惠比須神社　中西町にあり
祭神　佐伯鞍職
○金刀比羅神社　同　上
祭神　大物主命
○流胡子神社　龜居山の麓にあり
祭神　素盞嗚尊
○水天宮　濱の町にあり舊は神泉寺境内にありしが明治四年改革の際



此處に移す
祭神　大綿津見神　安德天皇　二位尼
○存光寺　禪宗なり
○今伊勢神社　伊勢町にあり
祭神　天照皇大神
○宮の尾　毛利元就陶全姜と合戰の時陣屋を設けられし處なり故に要害の鼻ともいふ
○小浦　船子どもおはく住居する處なりいにしへはわびたる家のみなりしが今は櫻など植ゑたるさへありて竈の烟もいと賑はへり
○蛭子神社　小浦にあり
祭神　事代主命
○西行返　西行法師此處に來て島れ女に道を問たりしにとみに應へもせざりしかば「空蟬れもぬけれからにはと問へば山路をさへもおしへさりけり」と詠たりしに女はゝゑみて。もぬけれから。かとおそよむべけれ既にから。にと定めたまひたれば答ふるによしなしといへりければ西行詞なくて此所より空しく歸りしと云ひ傳ふ

○二王門跡　長濱より本町に越もる道なり此邊も櫻多し

○新町　いにしへは最賑はへる遊廓にて全盛れ太夫もあまたありしが
いつれ頃よりか菅掻れ音淋しく打掛れ錦らさひて踏ならす高足駄
れ昔はさしかけ傘れ柄と共に長く絶果たり實にきれふれ淵はけふれ
瀨と替る流れ身れ定めなきに此處もまた遊女れ故郷となりたり

○德壽菴　存光寺れ隠室なり堂内に金石れ地藏菩薩を安置す

○瀧れ尾　山上にさゝやかなる瀧あり此處舊釋迦れ大像を安置せる堂
ありし故に大佛れ原とぬへりしを近年改て今れ名になりたり○此邊
も櫻ふはき故に櫻が茶屋などぬへる樓あり又雪れ眺望も甚よしとす

○梅林　梅は近年植たるもれなれども地味相應なしたるにや年々に繁
茂し花れ頃は山風遠く薫りて衆人れ袖に餘るされば文客かならずた
づぬべき處なり

眼にあたる木はみなうめれ月夜かな　鑑史

○福壽坊　眞言宗なり近來大佛を安置す

○北之神社　舊は北之藥師といへりしが改革れ際神社に改まれり

祭神　猿田彦大神

○寶壽院　眞言宗なり本尊阿彌陀如來は往古當島網ノ浦れ海中より顯
れて靈驗多しといへりまた堂内に豐太閤れ納めたまひし藥師如來を
安置す

○鳥居松　岡れ上に松二樹並び立るさまれ鳥居に似たるに依て名づく
此邊も櫻ふはく眺望よき處なれば霞たなびく春れ頃は遊客宴を開き
ていと賑はしきところなり

○本町　北ノ町中ノ町幸町等れ名ありて商家軒を連ねたり中にも名物
れ色楊枝杓子木盃等をひさぐ店數多あり

○幸神社　幸町にあり○此邊を金鳥居ともいへり足利氏銅れ鳥居を建
んとして其功を竣ざりし處なりといひ傳ふ

祭神　猿田彦大神

○塔れ岡　本町より本社に參る要路にして五層塔あ
る龜居山につゝけるが故に此名あり

○學校　本島内れ小童すべて此門に入る

○光明院　淨土宗なり天文れ頃住職以八上人は不凡
れ大德なりしと傳稱す

米齋木造之鹿

○谷ヶ原　茫々たる平原楓谷れ山上につゞけり牽鹿常に群をなして浸芽色つく秋れころ妻とふ聲れあはれなるは風流士れはらわたに去むなるべし

谷ヶ原牽鹿　八景の一

やつかはらむつれて遊ふ鹿見ればともに業む神の御園か　千實

因に云ふ鹿れ名所を谷ヶ原としも定めたるは然るとながらまた神祖に眠りあるひは市中に遊びて旅客に馴るゝなど皆憎からぬさまなり抑鹿は大神の蓄(けもの)と稱して往古より之を獵る事を禁じ代々領主れ保護厳しく若し誤つて害する者あれば即罪に行はる故に其數年々繁殖すつらつら考ふるに鹿は神代に大麻(おほあさ)迦(かぐ)久(くの)神と占業(うらなひ)に用ゐられまた迦久神といへる説ありて幽冥に去たしく仕奉る獸なり瑞應圖に云ふ鹿者純善之獸ナリ王孝則白鹿見ハルとも見えて角あれども常に怒れる色なく其性の狡猾ならざるを神も愛したまふなるべし

○神力寺　眞言宗なり○酒此地ふ寶泉院といへる寺ありしが廢寺となりける故當寺を龍の尾より移したるなり

○秋葉神社　南町ふあり

祭神　火産靈神

○紅葉谷　渓水清くして巖石奇なりかく渡す橋のさま最趣深く両岸に樓れ大木ありて花の頃は薫れる白雲樓の軒にたなびくあるひは時鳥を聞き暑を避るにたよりよく紅葉は元より谷の名におひて見るかぎり染つくし又雪の日は玉子酒の樂み自在にて雅となく俗となく四時に客のたゑる事なし

秋日遊楓谷

丹楓蔭水々奔流　臨水家々起小樓　想得
絃歌人散後　數聲鹿鳴滿山秋　撚白
谷のもみぢ染つくしたり
ときゝて
日をへなは鹿の蹄に羅るへしとく行て

紅葉谷ノ図

見ん谷のもみち葉

○四之宮　紅葉谷にあり○此邊秋夜虫聲いとかなし

祭神　不詳

社頭明燈　八景は一　芳樹

影うつる月は光も消たりけり波はてらす宮ばともし火

涙は上もみなともし火は花咲て春をとこよはわたは大宮　穉守

社頭賞月

百八廻廊圓海宇　大潮浸月夜過午　此時安得起龍王

同見凌波素娥舞

鏡地秋月　八景は一

嚴しまいつくはあれどくもとなきかゝみか池の秋は夜の月　正風

三笠濱暮雪　八景は一

誰もみな家路わすれてきてそ見る三笠は濱は雪は夕くれ　美靜

月はかけ花は光もおよはしとみかさの濱にふれる去ら雪　少年龜太郎

有浦客船　八景は一

漕とむる船もわまたに有は浦はうち安けなる波の上かな　季知

菊舍

ねきことはわとは浦輪は友舟や花紅葉にもつたふ成らひ　春齡

○瀧町　筋瀧橋を渡りて御山に登る道なり

●御山參詣之部

○大聖院　眞言宗なり當院は代々本社の別當職にて座主と稱したりしが明治四年改革の際社役をはなる創立は大同元年なれども天文の頃ひに舊記を失ひたれば委しき事はえるよしなし然れども治承の御幸に當院の住職を阿著梨になされまた天正年中に仁助法親王御止住の事見ゆたりされば昔時寺格の輕からざりし事思ひやるべし新講堂に豐太閤の守本尊たりし等身不動明王を安置す○什物の內聖德太子の像は巨勢金岡の畫きたるに後京極攝政良經公の讃ありて珍らしき者也此外弘法大師の眞筆等あれども略す又豐太閤當院の書院にて和歌の會を催したまひたりし時の歌三十六首を一軸にして是又秘藏せり

○多聞坊　眞言宗にて彌山本願と稱せし寺なり

○西方院　眞言宗なり○當院の庭は雪舟は造りたるもれなりといひつたふ

○一の鳥居跡　御山登路の麓にありしが今はなし

○祈不動堂　本尊不動明は棟札裏記に毛利家人佐世元嘉文餘元年三月中旬本願軍關白大政大臣太閤秀吉公高麗御弓矢被思召立同二年高麗悉從八月御歸朝爲在御沙汰記置者なりとあり依て太閤護身佛たると云ふ

○瀧れ宮神社　末社○例祭　二月一日　七拾五坪四合　一の鳥居より一丁

祭神　瀧津姫命

○白糸瀧　瀧宮れ山上にあり淚り落る水勢激く實に白糸を亂せし如し此邊螢る多く瀧のしら玉に散みだるけしきいとすゞし

瀧宮水螢　八景の一

雲井より落くる瀧の宮のへに星となかれて飛はたるかな　忠敏

○御幸石　治承四年高倉上皇此の石上鳳輿をおろさせ給ひ白糸の瀧觀覽あらせられし所なり

○中の堂　休堂とも云ふ一の鳥居より七丁余登路甚だ嶮岨なり故に強詣人此堂に憩ふまの處に名物ちから餅をひさぐ

○幕石　御山登路麓より十一町にあり數百丈の巖壁さながら幕を張りたる如し

○岩屋藥師　仝所の上岩洞の内にあり

○力石　一名太夫返しの石と云ふ里諺に福島左衛門太夫正則登山の時まの石の所にて怪異の事あり直に下山あり しと云ふ

○二の鳥居　一の鳥居より十五丁

○二王門　登路十五丁にあり古は未刻より登山を許さゞりしが今は此禁なし

○大日堂　麓より十八町にあり御山の本堂にして所謂神護寺ゐれなり本尊大日如來建立は大同元年弘法大師歸朝海路の序て當嶋に立寄給ひ開き給ひし堂ゐして堂内古代の燈籠あり

○水晶石　二王門と大日堂の中間小片道路に散在せり將又一大巖石表は常の如き石ゐして中央の穴より伺ば數丈の石悉く水晶なりと云ふ

○船石　仝所にあり形船に似たり四方拾間の巖にして岩上樹木青々生ず岩下石像の地藏あり

○滿干石　仝所にあり

○烏帽子岩　大岩二個あり此處地御前神社遥拜所あり

○龍燈杉　仝所大明神遥拜所の傍にあり一大老杉數百年を經枝幹屈曲して龍の臥したるものゝ如き形をなせり近年枯れたり此處は例年舊正月元日より七日間の內夜分遠近老幼男女龍燈を拜觀するに便りよければなの杉のもとに群集す故に名づく

○頂上石　島內第一の高峯御山絕頂にあり高さ三丈余周圍四丈余なり

○鐘撞堂　同所に鐘を釣りたり于銘曰く　伊都岐島彌山水精寺奉施入治承元季丁酉二月建立聖人永意施主右大將平宗盛とあり

○毘沙門堂　同所にあり方三間五尺堂中武林士式寫彌山佳景の題額あり今は燒失せり武林は孟子六十八代の裔にして忠臣藏義士武林唯七の祖なり

○玉取石　石面に玉を取りたる三尺余の痕跡あり

○求聞持堂　桁二十五間梁十五間本尊虛空藏菩薩は大師の作なり此堂は大師求聞持修法滿座の靈場にして道場廿四座あり修法の行者千有余年の今日に至迄一座も絕る事なき靈場なり後ち長享元年に再興し降て又慶長年中福島正則修營せりと云ふ堂內に大師手跡其外什物ありしが惜哉堂宇共に去る十八年火災に罹り燒失せり

○關御井　同堂岩下にあり大師修法の加持水にして甚だ淸冽なり

○曼陀羅石　同堂の脇數十丈の盤石に梵字又眞字を鐫りたり大師の作と云ふ

○御山神社　攝社○例祭　二月一日　山地　三拾三坪　一の鳥居より十八丁

祭神　市杵島姫命　田心姫命　湍津姫命

當社は大神御鎭座の始め影向ありし御舊跡なり故に三柱の姫大神を鎭祭し奉れり故に三姫神と申奉る御山を彌山と云しは佛家の徒山の不凡なる須彌山に似たるに比し彌山と稱せしか明治四年以來御山と復稱し奉る此の處數百丈の絕壁海に枕し人をして股慄せしむ又遥望の景殊に佳なり

○石鳥居　鳥居御神前の石鳥居は元亦なりしを元祿十二年卯五月五日藤瀧家老上田主水(龜次郎氏先祖)氏の寄進なり

○神鴉　形細くして凡鴉に異なり大神此の島に御鎭座の時隨ひ來れる由毎年雌雄一双を產み舊九月廿八日向地大野村大頭神社にて子別れの式あり親鴉の行方を不知子鴉のみ二双島に殘れり島巡七浦の別な

る養父崎神社御啄式の神鶏即ちこの神鶏の事なり委細は社傳にあり

御山神鶏　八景の一

世と共に勤て神に仕ふるをわさからすとや見そなはす覽　重遠

○奥の院　大師堂彌勒堂等あり今は荒廢せり

岩國より來るとび火不動石藏ありしが今は破滅せりそとばの事なり

○龍ヶ馬場　駒ヶ林とも云ふ巖上に馬蹄の跡ありそは弘中隆包毛利元就公と戰ひし時の陣營跡なり此處にて隆包敗死せり

○三劍の窟　龍ヶ馬場に至る路にあり往古劍を收めし處なりと云ふ

○龍ヶ窟　一名鵄摩谷の窟と云ふ往昔龍の出しと云ふ巖穴あり深さ量るへからす

○鵄摩谷　盤石覆ひかゝりて自然に一室をなす弘法大師鵄摩修法のありし處なり内に大師の像を安置せり是より二王門に出順路下降す又谷に從ひたゝらがたに出る道もあり

●御島巡之部

○長濱神社　攝社○例祭　一月二十日　百四十八坪

祭神　興津彦神　興津姫神　○相殿　所翁

○長濱　一名[illegible]とも云ふ此邊櫻多く眺望尤好き處なり此處海水浴場の設けありて盛夏の候潮頭緩急波動の强弱を斗り内外貴顯紳士は勿論病者に至る迄て避暑に來る者多く實に適應の場所なり又大元浦網の浦等にて浴する旅人許多あり

碧海廻山樹色新　四時風景獨絶倫　遊入此地眞多事　世外七處胡神七里濱

○聖崎　三十間斗の洲嘴にありて是より東を嶋の裏とす風景尤佳絶なり

○蓬萊巖　岩上古松數株海風にもまれ容姿世に奇く蓬萊山と云ふに似たり

○海氣　清明の後殊に長閑なる日蓬萊岩の沖なる海上一面の金氣發揚して中に宮殿樓閣樹木等の形ち顯れ暫くにして消散し所謂蜃氣樓の類ならん

○杉浦神社　末社○例祭　三月十五日　七拾壹坪

島巡第一の拜所なり同浦砂濱五丁余古松老杉森々たり一名相生の浦と云ふ

祭神　底津少童命

島巡の時此浦に船を寄せ上陸求の輪を潜りて神社に參拜し神官祝詞あり笛を奏し願主始め各拜す終て朝餉の式あり最も古風の者なり以下七浦の拜式いづれも同じ

○金岡水　同處奥二丁にあり金砂多く交り居水清潔甘洌にして地海に接するとき鹹氣なし

○包ケ浦神社　末社○例祭　三月十五日　岩上三十六坪

七浦の外なり島巡の時船より拜す此邊大巖巨石皆糞に似たり故に此名あり

祭神　鹽土翁

○鷹巣浦神社　末社○例祭　三月十五日　貳拾坪

島巡第二の拜所なり此浦鷹の爪と云る貝あり島人ひろい取て簪其外の細工にして販賣せり

祭神　底筒男命

○腰少浦神社　末社○例祭　三月十五日、　貳拾五坪

島巡第三の拜所なり

祭神　中津少童命

○鰈崎　形似たる石あり故に名づく

○青海苔浦神社　末社○例祭　三月十五日

六拾壹坪

島巡第四の拜所なり島巡の時古式の午飯の式あり

祭神　中筒男命

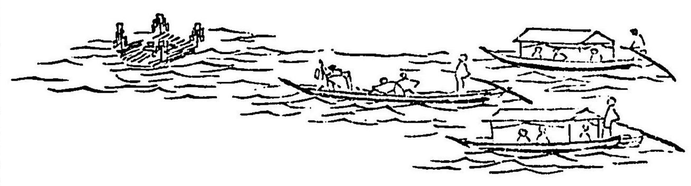
○陶全姜敗死跡　此浦奥十三丁余高安ヶ原と云ふ地あり全姜多々良朝臣大内義隆の臣なりしに主家を亡し後ち毛利家の爲め破られ爰に遁れ來り終に自殺せし處なり

○裟父崎神社　末社○例祭　三月十五日　參拾六坪

七浦の外なり此邊林木生茂巖石崎立波涙あらし

祭神　鑑鴉

鳴瓶ノ図



島巡の時船中より拜する所なり神宮海中に榊を浮べ榊を奏すれは靈鴉忽ち山上より翔來りて波に浮べる榊を啄へて御山に運ふ是れを島啄式と云ふ万一船中誤て穢あれは靈鴉榊を運ふ事なし慎まさるへからす

輕波一棹賽春祠　七浦風光逐次移　笛裏神鴉飛欲下
舟人搖櫓自遲々

○山白濱浦神社　末社○例祭　三月十五日　拾四坪
島巡第五の拜所なり洲濱三丁此處に菓子盆石と云ふ石あり
祭神　表津少童命

○革籠崎　是より西を島の表とす此地に早咲の櫻一樹ありて雨水の頃より蕾を破る

○須屋浦神社　末社○例祭　三月十五日　八拾八坪
島巡第六の拜所なり島巡の時餡餅の饗あり
祭神　表筒男命

○須屋の清水　御床より流れ出る淵水なり往來の旅船汲て海路の用水とし賞翫す

○御床浦神社　末社○例祭　三月十五日　貳拾八坪
島巡第七の拜所なり御社殿甲の紋をなせる一大巨岩の上に建設す
祭神　伊都岐島姫命

○貝殼塚　大江の浦十三町斗りの山間にあり弘治年中陶敗亡せし後ち殘卒此處に忍居磯邊の貝を取露命をつなぎし處なりと云ふ

○内侍石　大江の浦にあり治承年中德大寺實定卿本社に參詣あり歸洛の節島人有子内侍あかぬ別れを惜み此浦まて送り來て悲歎の泪にくれし處なり後津の國住吉の沖にて身を沈めりとそ

○鞴踏陶　平宗盛彌山寄附の供鐘を鑄さしめし處なり一名語りの濱とも稱そ

○網の浦　此邊櫻多く春の景掬そへしこれより大元浦へ越る道を花の洞と云ひしが實に其名に反かそといふべし

○淺葱櫻　白花水色を帶ふ奇木なり

○寶物　寶庫に納まれり拜見せんと望む人は社務所にねがふべし

○嚴島寶館　明治廿八年四月建築御垣ヶ原にあり東西廿五間南北廿五間寶物館拾貳間奥行六間嚴島寶館の額横一間天地二尺九鬼君の筆

○高倉天皇之御扇　壹本
○安德天皇之御甑具　六品
御衣　石帶　笏　劍飾　瓶　槍扇　何れもいとちいさし
○長翰　貳拾五枚　○親王御樂筆　貳枚　○葦手書槍扇　壹本
○假面　九面
抜頭　還城樂　陵王　納曾利　散手　貴德　採桑老　二の舞　同瓶
面　以上承安れ頃朝廷より御寄附れもれなり中にも抜頭の面は享和二年天覽に備へし時古物殊勝の品に思召れ大切に致すべく旨叡翰を賜ふ
○奚婁　壹振
假面同時の御寄附なりと言ひ傳ふ
○鼓　壹挺　同上　○笙　五管
第一小櫻第二春風第三小男鹿第四國家丸第五獅子と稱す中にも小櫻は高倉天皇御愛翫れ器なりしを治承四年御幸れ時御奉納ありしもれなり
○篳篥　壹管　○笛　三管

第一は肚臍にて造り第二は銅第三は異なるもれにあらず中にも肚臍れ笛は豐太閤征韓れ時彼國より奉ぢしを毛利家に賜ひ同家より本肚に寄附ありし者なり
○高麗笛　壹管　○和琴　貳張
法華と銘あり○律板柱とも添ふ
○琴　壹張　○箏　壹張
表裏とも斷紋あり○平重衡愛翫れ器にて唐れ雷家れ作なりと傳稱す
○琵琶　五面
第一谷川第二滝涙第三磯涙第四落月第五無銘なり中にも第一谷川は玄上を摸して作りし者なりと傳稱し最も殊勝なるものなりまた第五は九條道房公愛翫の器なりと傳稱す
○太鼓　五挺　○羯鼓　三挺　○二ノ鼓　壹挺　○三ノ鼓　壹挺
○獅槍刄木　壹枚　○小忌衣　壹領　○法華經　高倉天皇宸筆　八卷
○壽量品　同上　壹卷　○壽命經　同上　壹卷　○經卷　壹函
法華經貳拾八卷無量義經觀普賢經阿彌陀經心經願文各壹卷都て卅三卷平相國清盛公の寄附にして願文は公の自筆にて餘は一族三拾貳人

各壹卷を分ちて書寫わたしものなり其飾裝の結搆盡善盡美實に當時平家の隆盛見るに足れり

○法華經　八卷　壹卷闕

平清盛同頼盛の両筆なり

○理趣經　弘法大師筆　壹卷　○般若心經　同上　壹卷

○細字法華經　同　上　八卷

外函竪三寸横二寸深壹寸七歩字形の小さき事ふしてをるべし

○華嚴經　筆者不知　五拾五卷

反古の裏に寫して殊勝なるものなり○反古經とも云ふ

○賀裝　弘法大師隨身品　壹　肩　○鈴杵壺盤　同上　壹具

○五鈷三鈷獨鈷　同上　各壹握　○赤栴檀佛像　毘首羯摩作　壹龕

○古文書　貳百拾八卷

神領　制令　祭祀　營繕　寄進　雜翰　等各部分なしたり

○榮花物語　松木内大臣宗條公筆　全部　○奉納和歌　藤原經尹卿筆　壹卷

○和漢朗詠集　冷泉爲成卿筆　壹卷　○本島八景畫時歌　諸名家筆　三卷

○百人一首　外山光和卿筆　壹冊　○香記　壹卷

○掛物　廿六幅

巨勢金岡東福寺兆殿司狩野探幽等の筆あり

○硯　貳面　○墨　壹挺　文臺硯箱共　壹脚　○太刀　五拾四口

螺鈿　兵庫鎌　嚴物作　裝束帶　錦色縣卷　衛府　斷髮切　綱切

稻光　彦左近　等と銘せるものあり　信國　天國　友成　貞秀　一文字　久國　助次助家兩作　國俊國行兩作　菊一文字　兼光等を以て稱譽す

○劍　三　口　○刀　四十七口

亂髮と銘せるものあり作は　正廣　則國　西連　左文字　保昌五郎　地藏信國　助國　等を以て稱譽す

○短刀　廿三口

天國　神息　友成　波平　行平　國光　正宗　國行　國俊　志津三郎兼氏　國光　兼光　村正　定廣　等の作あり

○薙刀　五　振

貞宗　宗貞　等れ作あり

○鎗　八　本

信國　金道　等の作あり

上に擧げたるは人々のよく稱讃するものを拔出たるにて此外にも名作數多われはなは悉く熟覽して燒刃匂等の眞味を知るべし

○弓　九　帳　○矢　十五筋　○甲冑　十三副

源義家同義光平重盛大內義隆等の着用ありしもの各一副また小櫻絨一副あり殊に古の名作なりと傳稱す又近來淺野家より寄附ありし物は兜面鎧胴鎧膝鎧籠手脇當大袖等いづれも名作なる中に兜は宗曆の作にて世に此類なき由折紙に見えたり

○古鏡　二面○曲玉　十二顆○七寶杯　壹箇○青磁塔

○蘭奢侍香　壹包○赤栴檀　壹包○沈ノ柮　長五尺三寸余　壹本

○沈枕　壹箇○青磁枕　壹箇○黃楊駒　春日作と傳稱す　壹頭

○銀獅子　壹頭○木馬　辨慶の甑物と傳稱す　壹頭○歌器　壹具

○古銅印　二顆○古錢　三百八十九枚

豐大閤征韓の時納めたまひし寶錢なり

●嚴島神社扁額表

木馬　鶴　東洋　龜　泰嶺　壽老龜鶴　鄭茂銀　松月　平安

乘久　鷹　村上菜昌　神馬　狩野探圓　東下り　魯堂

八景和歌　寛之外七名　常盤女　節心齋梁石　鷹鴉鳩　東都龍兒　竹虎　文記

森老人　中路定矩　孔明玄德關羽張飛　狩野閑山　浦嶋　應震

人物　南鶴　西京下賀茂神社　岡亮秀　石摺　東坡之書　桑之豫讓　龍兒

徘徊　舛六　義士　讃岐阿賀長右衛門　彫刻雲龍　狂言釣狐

楓樹群鹿　豐後高松檜原施久　道之字　岩國屋吉三郎　八幡太郎義家一鳳

武松　山本雲溪　負鐘辨慶　俊峯　神馬　喜山　能舞猩々　立洲

能浦島　梅山　獅々　俊峯　歌仙　三拾五面　歌仙　三拾三面　客神社組入外側

神鶴鳥喰式　菜園　勝嶮　爲龍　關羽　薩原惇海　竹虎

農上神鴉　墨湖　依藤太　紫絢　王義之蘭亭　菁華　關羽　蘆雪

龍　岩舟　五峯樓印譜　昇齋　鷲波　雅信　獅々　愛信

楓樹鹿　春卜　波　船牛面　松竹梅

漁夫幹信　鳴門海月　秋田　永叔　支那人物

能舞臺雛形　反毛鷄　沖鳴　孔雀　宗紫石　狛鉾　丹倫齋

八雲梁　中山梁主　松鶴　瓦英　老小町　三嶽　群仙　越海芳明

安宅關　雲嶽　鐘馗　藍江　賴政　直彥　彫刻龜上山　左徠

狂言末廣　文波　官女押畫　和氣清麿押畫　龍　杏雨
吳羽　綾羽　應震　松虎　專定　墨畫孔雀　岸湖　陵王　姿隆恒
龍虎　龍山　關羽　中原雲軒　白鹿　書　春水　張良　金波
競馬　山田文厚　龍虎　連山　猿　雪晴　黃石公　張良
鹿傍吹笛　老婆少女　左官作土鹿　虎　應舉
絕妙好鮮石碑　海德　龍　雪晴　墨竹　美曾岐　吳陽
籃中百花　武駿　瀑布鯉魚　探幽　竹取翁　二永　自順德院至天智天皇百枚附弘嵩附名額壹枚
旭日走玄　中務晴川院　墨竹　岷山　築地蘆藩邸　抱一　紫陽花雀　賀易金府
慶德　書　甫貝　神馬　春晴　靜觀　書　三石　楠公　恕翫
祭式　源重方　虎　岸湖　牡丹孔雀　雪蕉　當盤女　法橋万壽
松　畫所預正五位　仙人渡波上　東岳　重暉　書　三石　漁夫幹信　觀山
加藤ニ虎　鈴月山　龜鶴年壽齋　米菴　梧桐鳳凰　應舉　三仙人
雨中山水　楊岸　鷹　蝦夷人　日影　藤原光芳
至誠　書　清原宣論　西王母　梅山　支那騎馬武者　精一　本社圖　米齋
散手　有景　武松　南洋　賤ヶ嶽　肥後白川　六歌仙　文鳴
御供船　立洲　管絃船　仝上　江波漕船　居管絃　梅山

眞水　爲龍　竹鷄　應舉　栗巷書畫　醫學士中村島回式
萬古清風　三石　大杯　細野仙助　婦女觀花　松霞堂　虎　龍山
田植　二永　龜遊萬歲池　鹿　玉潤　徘徊　北川殿春
扇面三十六歌仙　本社組入外面左右拾八枚有金地古額　太平樂　丹倫齋　嚴島五律　刻字應量海
仝上雜詠　仝上黑川道祐　生田森戰圍　藤原常之　神功皇后　驪山　福海壽山　書　蒙處
壽星抱鶴　抱一　神功皇后　雪景　神廟記　亞聖羅國公　群仙
天然木龍　櫻狩紅葉狩　藤原光孚　和歌三神押繪　大磁石　壹面
扇面歌仙　本社組入外面外右脇三面有金地古額　仝上　仝上左脇三面有　蛾蛮仙人　兆殿主
彭祖　梅山　平貞盛　雲嶺　漁樵問答　二永　竹反毛鷄　松林
耶馬溪　皆雲　大幅山水　梧莊　東方朔　龍山　錦帶橋　老泉
歌仙　本社組入左內拾九枚有但付屬額共　仝上　仝上右內拾八枚有　內侍出會　夏神祇歌集
瓶花　逸峯　奉納和歌集　夏神祇歌集　蕭雖　書　七歲童畫雅
櫻花　鹿　峻峯　徘徊　行春乃　仝上　雲本雷山　印譜
麒麟　大鹿角　湛通　刻字　清淨　錢ノ島居
萬々歲　書　小童繪　原鵬雲　綱斬鬼女　青柳軒　曙馬
鷹　綵色　辨慶　元信　曾我朝比奈　木偶　牛若　元信

置上蒔繪　仙人圍碁　岸良是蓬萊　鳥尾中將　曾我朝比奈　峻峯
嚴島七絶　刻字石川丈山　直實　丹覺　敦盛　全上　鷹　綵色
嚴島七絶　金子濟民　鹿馬　長嶺　陵王童舞下野國那須　納曾利全上
奈須與市　丹倫齋　錦帶橋　白峯齋　八景和歌　紫民　檀風　藍江
鹿敬　東都吉思温　龍　探淵齋　品尙　直彦　拾文錢寶珠　仲貞
鹿敬　爲龍　七福神　山水　難波原菴　全上　雪中山水　船雛形　八幡太郎義家有景
玻璃鏡　全上　文王呂尙　文晃　扇面三十六歌仙　揚霞　加藤清正　張府城
鯉魚　雪塘　墨狂歌　芥河貞佐　旭日波　羅生門　尙信　永直
松竹梅　岷山　龍　伊川院　松ヨ旭日　龍虎　峻峯　龍
虎　泰嶺　楓鹿　神馬　洞白
耕作　永叔　神光照海　三條公　三福神　常信　山姥　蘆雪
張飛　古秀　神馬　左近　群馬　探信　寶船
三浦翁輔　森桃江　彭祖　藍江　猩々　梅山　大田道灌　芳園
背砥左右衞門　玄德　楠亭　大哉　書　賴餘一　孔雀牡丹　紫畹
虎　勝秀　松　雪塘　外國江灣　常春　著善　書　岡野政女

曾我五郎　法橋　惟清　書　三石　漁夫　藍江　虎　東洋
鷄　安懷　賴惟完　猩々　獅々　惶々堂　支那人物　發川院
雲漢　書　壽山　石山寺圖　刑部大輔　鳳山　岡亮　菅神　押繪
猿鹿　祖仙　梧桐鳳凰　木公伏田　徘徊　牛若　法橋洞
八幡太郎義家之應齋　鐵尤　峯彦　賴光蛛　晨鐘　山水　杏林女
揚弓　品詳記　油繪　峯鶴　玄德關羽張飛　尉姥　二樂齋
文法　南陵　竹根　野間崖樂助　昇龍　山田民　神馬　貞嘉陵
竹根　正司又一郎　神馬　二樂齋　全上　盡濱長久　競馬　峯彦
篤敬　書　牛若　萊園　徘徊　龜龍　刻字
松鷹　戟花　阪府天王寺堺住吉　六歌仙　神輿　大巧齋
將棊ノ圖　至誠　書　双龍　龍山　事代主命騎馬　惇清
松鷹　法橋耕月　鳥居神拜　桃江　東都青山邸　旭鷹　貞勝
菅神　成應招　字浮彫　龜上松竹梅　太田暢直　牛若辨慶
兒童遊戲　藤原廣鄕　竹　神馬　畫所預大藏大輔　龍　狩野休情
金策和歌　貞碼　壽　刻字　徘徊　刻字　一糸　競馬　柿本人丸
守眞　書　富士越龍　伊川院　揚弓　品評記　支那人物騎馬

揚弓　品評記　蟠龍　刻字　羽客文猿　獅々　豐田
楠　公書　能番組　朝日影　尉姥　文庫奉納書目
鹿　和歌　若菜　蓬萊書　徘徊
鹿　二樂齋　三笑　壽老鹿　山長　墨梅　春濤
婦人石橋舞　田植　徘徊　竹邸　仝上　文政五壬午
仝上　桐大板　莊嚴仙島　朝散太夫　楓鹿　苔石　鳥居　菜園
算法　槍山義　張良　石川紫晚　油槍外國婦人　華鳥亭　遊妓荒　芳園
扇面竹山水　婦人　鹿角　猿鹿　雪晴
壽老眠鹿　陽山　神女　神馬兎　立洲　關羽　典類
見童遊戲　五福　書　天方　本嶋八郎　寄合畫　松鷹
蓬萊　峻峯　老松　洛東光雲亭　神馬　萊園　東方朔　龍山
米點山水　文猷　巴家義　甫富　六歌仙　松虎
信實　刻字　七福神　春陰　神馬　二水　曙馬　惇則
壽老龜　神馬　猩々　南嶂　雲龍
六勿銘　落欵　石四丈山　松鶴　山城守　錦帶橋　素白齋　楓林　燒酒
油槍　江戸門芝御士　木馬　彫工　平井　古鉄　外國船

銅　巢夫去遊　雪天鳥居　南嶂　神馬　勝田
山水人物　百人首奉額記　玄德關羽張飛　宗其　鳥居鹿　松林
不二油槍　江漢司馬峻　太湖石　老山　和歌　三粟田　走馬　法橋祐常
神馬　常照　社頭圖　神馬　連荒雄　木鹿
奥羽凱陣　正直乃　旭鶴　渥々
龍　闘嶮　徘徊　自長　發陽　書　佐久間　牡丹　墨湖
動靜　金子正十郎　芝僊竹壽　蓬洲　辨慶　梧桐鳳凰　梅山
梅　永年　反毛鶏　二淵　梅牛　徘徊　丹項
神像　加々祭遊亭　東風吹波　書　菅神射術　立洲　養和　書　八歳童
芍藥　立洲　老夫牛　梅山人　白梅黄鶯　梅山人　錦帶橋
松竹梅　徘徊　風律　草摺引　立洲　楓樹仕丁　仝上
徘徊　かはらぬ　鳥居建築雛形　神馬　江阿彌　讃書有至味
紅葉槍　徘徊　樂鳳社　能樂翁　押槍　錢ノ鳥居　鷲濤歴閣　金井之恭書
徘徊發句　有節撰　大田道灌　帆船　龍虎　彫刻
楓鹿　松山水　小川清處　宇治川戰場圖　雲嶽　神馬　平安雪亭
三千風　藍江　丸盆發句　大必　胡子大黒　石盤摺　七福神

和歌　馬　大江寛信　田植ノ圖　帆船
馬　鐘馗　暗嘆　馬　藤原俊固　麒鳳　中臣呑海
帆掛船　和歌　羅生門
猩々　松ニ人物　大尺八　大笛
書　林玉　女　俳徊發句　雲嶺畫入　仝上　錦帶橋
具足圖油畫　絹細工人形押畫　曾我五郎乘馬圖　仝上　金糸細工　雲龍圖
俳徊發句　龜甲ヘ彫刻　嚴嶋七浦島廻圖　牡丹錦鶏　龜山福綱畫　馬
忠孝書　紫雲垂海　梧竹書　天然木天狗面　透彫近江八景
絹糸細工門覺上人　居管絃祭圖　八雲琴　天狗面　紙製
嚴哉德宮小路康文書　高安流謠曲　眞貫流柔術　虎ニ竹ノ畫　湖南諸葛監畫
海老軒七勝詩文　寄合書　花鳥圖　岡煥畫　人物圖　松花堂元岱畫　書　賴杏坪
金牡丹孔雀圖　戰爭圖　義勝畫　龍　小龍畫　龍　彫刻　工　義爲
書　頼協　書　蛇山　桐鳳凰　刻彫　駒形　天明元年
黒色山水　耕石筆
○年中定祭日并行事式

官　祭

○月並祭　一月一日（二月以下同之）御簾捲垂神饌進撤祝祠奏上神官拜禮等の次第は新年祭の條に委くしるす餘は准らへてしるべし
○日供　祭日の外日々獻ず
○元始祭　同月三日
○孝明天皇祭　同月三十日○御垣の原に遙拜所を設く
○新年祭　月日不定○二月四日式部寮に於て班幣あり地方廳へ到着の上吉日を卜して祭日を定む其式は地方長官以下祭に關る官員及び神官共に前日より齋戒す當日早旦神官神殿を裝飾し午前第八時神官地方官一同幄舍に着く次に御幣物を幄舍の前に入置く次に宮司祉殿に昇りて御簾を捲き畢て例に倣す此間奏樂次に禰宜以下神饌を傳供す此間も奏樂次に屬御幣物を辛櫃より出し假に案上に置く次に宮司御幣物を神前の案上に奉り座に着て祝詞を奏す次に地方長官玉串を奉り拜禮畢て幄舍に復す次に屬以下拜禮次に宮司玉串を奉り拜禮次に禰宜以下拜禮次に御幣物及神饌を撤す此間奏樂次に宮司御簾を垂る畢て下殿神官一同幄舍に復す此間も奏樂次に退出す○神饌八臺　和稻荒稻　酒二瓶　海魚　川魚　海菜　野菜　葉　鹽水　以上

○紀元節　二月十一日○遙拜所同上
○神武天皇祭　四月三日○同上
○例祭　六月十七日○祭式新年祭に同くして地方次官同屬官等參拜あり
○大祓　同月三十日
○神嘗祭　九月十七日○遙拜所同上
○新嘗祭　十一月廿三日祭式新年祭に同じ
○大祓　十二月卅一日
○除夜祭　同月同日

私祭

○神衣祭　一月一日○午前第一時神官一同幅合に着き禰宜神衣を內陣に奉る○神衣は白綾に龜甲の紋を織出したるものなり前年棧殿に注繩引廻し服工祓してこれを調し社頭に收む神官これを裁縫して本日此式あり
○新年祭　同月同日○舞樂あり振鉾
因に云當島に家居せる者は毎朝小柿を持て神前に潮を汲歸り屋內を清むる事一日もかこたる事なし殊に一月一日は未明より戶々きはひ出て神前に至り潮を汲み家をそゝき身を清めて本社に參詣するを例とす是を若潮迎へといふ
○同二ノ祭　同月二日○舞樂に萬歲樂延喜樂あり
○同三ノ祭　同月三日○舞樂に太平樂狛鉾胡德樂陵王納曾利あり本日の大平樂は治承年中左大將德大寺實定卿本社の廣前にて奏たまひしを例として世々神官野阪家にて勤め來れり○因に云當社の舞樂は最上古より傳はりていにしへの盛なりしことは神庫に收まれる樂器を見ても知るべしまた拔頭蘇香還城樂等の秘曲もみな舊神官れ家々に傳はりて今に存せり○舞樂奉納せんと願ふ人あれば臨時にも行ふ事あり
○御洗　延年ともいふ舊歷七月十四日なれども御一新の際より此式日定まらず御洗い此日は廻廊を洗らいたる後ふ海中へ檀をかまへ其上に寶藻の玉を釣りしあるを島人幾百人と去れず群集して我先きふと水中へ飛込其玉を爭いとらんとすとらさとする水中にて上ゑになり下になり水中のはたらき中々見ものなり此式は祭禮の外なればを

こなはぬ年も有なり

○楊枝獻上祭　同月三日○楊枝は當島産物の第一なり故に獻す

○斧始式　同月同日

○地久祭　同月五日○舞樂に振鉾甘洲林霞扳頭還城樂あり○本日は未明よゞ行ひて朝日形御山の嶽よゞにはひ出て舞人の面を照すを例とせゞ故に日の出祭ともいふ

○月並舞樂温習　同月十五日二月以下準之また臨時にも行ふ

○月並祭　同月十七日二月以下準之

○月並和歌會　同月廿五日二月以下準之天神社の拜殿にて行ひ兼題に短冊を神前に掲ぐ

○敎會講中安全祭　三月十七日○講中に盤は幣殿にて拜禮を許す

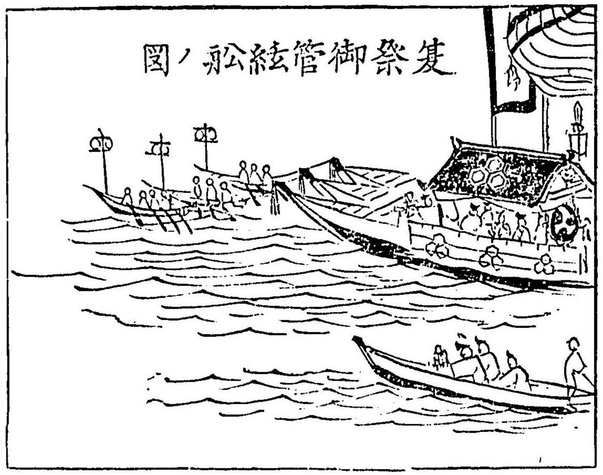
○回鶻神祭　同月同日

○推古天皇祭　四月十八日○舞樂に萬歲樂延喜樂陵王納曾利あゞ

○桃花祭　以桃花盛定日○舊は三月十五日を定日とせり○舞樂に振鉾一曲曾利古桃李花まひなし萬歲樂延喜樂敔手貴德陵王納曾利あゞ○此祭式は薄暮よゞはじまゞて音樂中桃花を本殿に獻す

○敎會島巡　五月十五日

○管絃祭　陰歷六月十七日相當日○此祭式は御船三艘を組で屋形を造ゞ神輿を乘せ奉ゞて神官左右に列す水主は素袍袴にて烏帽子を冠ゞ各棹を取るまた引船三艘蟻蛭の如く艦をかし並べて先に立ち大島居に前よゞ直に地御前神社海向ひの廣一里余前に渡り神事あゞて管絃を奏すそれよゞ本島に歸ゞ長濱神社大元神社等に前にても管絃あゞて御船を大島居よゞ本社火燒崎に漕入れ祭式最嚴重なゞ次に客神社の御前に至ゞ管絃等前の如しかくて御船を升形玉の御池の内に入れ三回めぐらして本殿に還幸なし奉るを例とせゞ○此祭式を拜んと諸國よゞ集ひ來れる



船袖艫相接して海原を狹しとす此夜各船の帆柱屋形等又戸々の屋上に掲げて獻る神燈幾數萬なることを知らずさらぬだに月明らけき夜燈火の影廣き海面を照らし管絃の音心耳を澄して誰かは渴仰の思ひ淺かるべき實に海面の大祭壯觀また類ひなかるべし○此祭式は薄暮汐のさし來る頃より始めて子剋ばかり汐の退く頃終るを舊來の式とす故になほ陰歷六月十七日相當日を以て行ふなり昔は神官供僧左右ゐ列座して神官管絃を奏し供僧迦陀を修したりしが明治四年改めて上文の如くなりたり

○因ゐ云此祭式に神船の供奉として廣島の町々より御供船と稱し渥々緋に金銀の糸もて種々の給を縫たる幕を走らし幟吹貫を押立今樣の音曲を雜しつゝ祭禮の前夜廣島れ川口を出て本日の祭式に關り翌日廣島に歸る遠近の男女これをも見んとて群集なす事またかぴたいし

○敎會歸社安全祭　九月十七日○講中れ拜禮式三月に同じ

○同靈神祭　同月同日

○菊花祭　以菊花盛定日○舞樂に振鉾一曲曾利古賀殿舞なし萬歲樂延喜樂散手貴德陵王納曾利等あり○式ハ桃花祭におなじく音樂中菊花を本殿に獻す

○敎會巡島　十月十五日

○天長節祭　十一月三日○舞樂に萬歲樂延喜樂陵王納曾利等あり

○神衣裁縫　十二月廿六日より廿九日に至る

○御煤拂式　同月廿一日

○鎭火祭　同月同日○午後第六時松明の式あり

○產物　當島ゐ產ゑて人れよく賞器するものを擧ぐ

○色楊枝　形種々に削りなして五色に染わけたる最も美しきものなり

○杓子　大小種々ありいにしへ島人淸心といへる者創り初たる故に淸心杓子といひて用ゐるに甚だ便りよし

○木匙　近來は形種々に削なしていとたくみなり

○木盆　摸樣種々彫刻せり中にも神圖等れ舊村また御幸松れ古木等を以て造れる者あり好事れ人愛翫すべし

○蘭　御山の深谷に生ず石蘭柔蘭片葉蘭鶯蘭岩千鳥蘭孔雀蘭等の數種あり文客盆裁にして愛すべきものなり

○岩茸　御山千仞の谷なる巖壁に產す採る者甚だ危しといふ

○薯蕷　御山に産するもの治養に功驗ありといふ
○松露　須屋浦に産するものをよしとす
○海松貝　當島の近海に産す甘味ありていやしからず
○目張魚　草籠崎の邊に釣たるもの味ひ殊に美なり
○櫻海苔　御床浦邊より出る雅人の賞すべきものなり
○總太郎漬　糖を水に浸して魚肉貝肉等を漬たり好事の人雅味なりとて賞せり
○雪花漬　豆腐の殼に魚肉貝肉菌等を漬て風味甚だ愛すべきものなり
○裏櫻餅　御垣の原にて鬻ぐ上戸の玄らざる味ひまた愛すべし
○木鹿　島人小川良平字米齋といへる老人の彫刻したるもの能く眞を得たりとて世に賞せらる明治十年内國博覽會場へ出して花紋賞牌を拜授せり

嚴島土産了

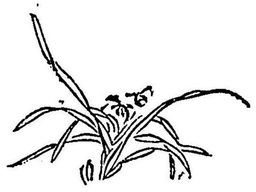
明治廿八年十月二十八日印刷
同　十月十日發行

定價金拾六錢

編輯兼發行者　島村武助　廣島縣廣島市字元柳町十一番邸
印刷者　繁岡政吉　廣島縣廣島市字尾道町百三十五番邸
印刷所　精巧堂繁岡活版所　廣島縣廣島市字尾道町百三十五番邸
發賣所　廣島以文社　廣島縣廣島市字大手町壱丁目三十八番邸
嚴島特約販賣所　福田富吉　仝縣佐伯郡嚴島町

版權所有

○薯蕷　御山に産するもの治養に功驗ありといふ
○松露　須屋浦に産するものをよしとす
○海松貝　當島の近海に産す甘味ありていやしからず
○目張魚　革籠崎の邊に釣たるもの味ひ殊に美なり
○櫻海苔　御床浦邊より出る雅人の賞すべきものなり
○總太郎漬　糖を水に浸して魚肉貝肉等を漬たり好事の人雅味なりとて賞せり
○雪花漬　豆腐の殼に魚肉貝肉菌等を漬て風味甚だ愛すべきものなり
○裏櫻餅　御垣の原にて鬻ぐ上戸の去らざる味ひまた愛すべし
○木鹿　島人小川良平字米齋といへる老人の彫刻したるもの能く眞を得たりとて世に賞せらる明治十年内國博覽會場へ出して花紋賞牌を拜授せり



嚴島土産了

明治廿八年十月二十八日印刷
同　十一月十日發行

定價金拾六錢

編輯兼發行者　島村武助　廣島縣廣島市字元柳町十一番邸
印刷者　繁岡政吉　廣島縣廣島市字尾道町百三十五番邸
印刷所　精巧堂繁岡活版所　廣島縣廣島市字尾道町百三十五番邸
發賣所　廣島以文社　廣島縣廣島市字大手町壱丁目三十八番邸
嚴島特約販賣所　福田冨吉　仝縣佐伯郡嚴島町

版權所有

025763−000−4

特31−339

厳島土産　（増補）

島村　武助／編

M28

ADC−3299